

水産科学の分野で活躍する女性たち 42

Dynamic Women@Fisheries Science 42

逆風に育てられて

村岡敬子

国立研究開発法人 土木研究所

KEIKO MURAOKA

Public Works Research Institute, Minamihara,

Tsukuba, Ibaraki, 305-8516, Japan

それは、ニートでゲーム三昧の息子との、親子喧嘩の一幕。

息子：「お母さんみたいに、楽しいことを仕事にしている人間に、俺の気持ちがわかるか！」

私：「ばかたれ！ 楽しいことをする時は、金を払うんじゃない！ 人のやりたくないこと、できん事をするから給料もらえるんじゃない！ 甘ったれるな！ ほげえ！」。

と言いつつも、内心は（私、傍から見ても仕事を楽しんでるように見えるんだ）とうれしくなりました。

女でよかった

私には、立派な学歴や経歴もありません。研究能力も高くありません。しかし、どんな研究課題やつまらない雑用であったとしても、それが必要な仕事であれば、それを楽しむ能力はあると思っています。これまでの数々のピンチや挫折、その時の周囲の支えが、今の自分を育ててくれました。

私の仕事人生は、始まる前から逆風の嵐でした。工事現場の監督を夢見て高専で土木を専攻、大学への編入を希望するも「女だから」と周囲に反対され断念。就職先を探すも、当時の土木業界では、ほとんどの求人条件に“男に限る”とあり断念。恩師からの「勉強が仕事になる職場」との勧めで土木研究所を知り、「女性研究職第1号」として今の職場に採用されました。

仕事が始まって、「女」はついて回りました。失敗すると「やっぱり女の子はねえ」、結果を出せば「女なのによくやったよ」。当時の同僚皆が敬遠した環境関係（魚類関連）の研究課題も、「女性＝環境に興味＝多分適任」という図式で担当者に。以降も、男だったら起こりえなかった数々の経験をしました。そして、当時の私は、負けじ魂で無我夢中に仕事をしていました。今は、遭遇した出来事の全てに感謝をしています。心無い言葉も含め、どれ一つ欠けても、今の自分はなかったと思うのです。

最大のピンチ「子育て」が、自分の大きな転機となった

最大のピンチは、子育てと仕事の両立でした。この最大のピンチのおかげで、仕事の取り組み方が一変したのです。

誰もがそうであるように、子供が生まれると、従前のように仕事はできません。保育園へのお迎えのため、定時退庁しなければなりません。いざ、仕事を自

宅に持ち帰っても、子供は寝付かず、思うように進まない日もありました。子供のけがや病気、入院といった予定外の出来事も次々と起こり、綱渡りのような毎日でした。今思えば、研究室の仲間や上司は何度もフォローしてくれたのに、感謝どころか、負けじ心をより強くしていたと思います。

こうした独りよがりの戦いも、三人目を出産した頃には、いろいろな意味で限界でした。綱渡りの綱が日々細くなり、ワイヤーのように細くなった綱で足先が引き裂かれるのでは、と思った時、ようやく気が付きました。「男のように働けない。しかし、きっと私の働き方がある」。そこで、自分の生活を見直すとともに、「子育てと仕事、どちらも100点満点」を目標とするのではなく、子供が小さいうちは、「子育てと仕事を合算して140点」を目指すことにしました。

それ以降、私は自宅に物理的な仕事を持ち帰ることを止めました。自宅では、仕事のことを忘れて子供に向き合い、一緒に寝ます。翌朝、子供たちがまだ寝ている間に、静かな布団の中で目を閉じたまま、その日の仕事の段取りや、前日までの研究データの解釈などを考え、職場では朝決めた段取りに沿って一気に物理的な処理を行います。定時まで終わるように、急に休んでも大丈夫のように…。すると、以外にも仕事が回り始めたのです。

精神的な余裕が出てくると、保育園や学校の場を通じた新しいネットワークもでき始めました。異分野の研究者や異業種の人たちとの交流を通じて、これまで知らなかった世界を知るとともに、いろいろな研究の進め方、異なる判断基準や捉え方があることを知りました。それを踏まえながら自身の研究を見直してみると、新しい解釈や不足している部分が見え始め、それを研究にフィードバックできたのです。研究分野をまたぎながら情報収集し、根を広く張り巡らした研究をする、これを自分の強みにしよう。そう考え、今に至っています。情報収集＝おしゃべり＝女性の得意分野。最大のピンチが気付かせてくれた、自分の仕事スタイルです。

そして日々楽しく

子育てを終えた今も、仕事のスタイルは変わっていません。異分野の研究者・異業種の方々と交流し、刺激され、支えられながら研究をしています。情報化社会の現在では、目的とする異分野の論文を、串刺し的に調べることも可能となりました。知らないことがあり、それを知る手立てがあり、自分が成長できる。そんな日々に、毎日ワクワクしています。

時には、理不尽なことや嫌なことも起きます。そんな時、不平不満は最小限に留め、その怒りを仕事につけます。怒りは、パワーになります。頭に血がのぼっているときって、意外と仕事が進むものです（他の人が声をかけにくいから？）。これも、仕事に割ける時間が限られていた頃に、身に着いた対処方法です。

面白きこともなき世をおもしろく、

すみなしものは心なりけり 高杉晋作